

I・HEAP (New Directions in Assessing Historical Thinking)

1章：ドイツにおける歴史意識：概念、実践、評価

担当：池尻良平（東京大学大学院情報学環）

ikejiri@iii.u-tokyo.ac.jp

著者

・ Carlos Kölbl

ドイツのバイロイト大学の教育心理学の教授。近年では、教授だけでなく、文化を包摂する心理学の活動も行っている。研究関心は、子どもと青少年の歴史意識、社会的理解、異文化間学習の調査など



・ Lisa Konrad (2015年時点)

ドイツのバイロイト大学の博士課程の大学院生。フライヤー大学とライプニッツ大学ハノーバーで様々な研究プロジェクトに従事。研究関心は、異文化間学習、ジェンダー研究、インターセクショナルリティ研究、教師の専門的なコンピテンシーなど。

■用語

- ・ historical consciousness | 歴史意識
- ・ competency | コンピテンシー
- ・ narrative construction | 物語構成
- ・ ability | 能力
- ・ intersectionality studies | インターセクショナルリティ（交差性）研究
- ・ mental structure | 心的構造（or 精神構造）

■議題

- ①歴史意識はどの程度のスパンで、どの程度身につけていくことが想定されているのか
- ②Pandelの歴史意識の構造的なモデルに対し、Lückeが発展的なモデルを提唱しているが、他にはどんな発展性があるか
- ③歴史的思考の最新のモデルと照らし合わせた場合、歴史意識ならではの特徴は何か

■概要(p.17)

ドイツにおいて歴史的思考の評価を考える際、ドイツの歴史教育において重視されてきた「歴史意識」を理解することは重要である。本章では、①歴史意識とコア要素の定義、②学校のカリキュラムにおける歴史意識の実践状況、③評価可能なコンピテンシーへの変換の3つについて概説する。

■歴史意識とは何か？ (pp.17-18)

- ・「歴史意識」がドイツの歴史教育で重視され始めたのは1970年代
- ・その後、歴史意識について大きな影響を与えた研究者として以下の2人がいる
 - ①Jörn Rüsen (1993)
 - 歴史を語る行為を中心にした機能的なアプローチを提唱（後述）
 - ②Hans-Jürgen Pandel (1987)
 - 歴史意識を7つのカテゴリーに分けるという構造的なアプローチを提唱（後述）
- ・近年では、Martin Lückeの社会的不平等に焦点を当てて歴史意識を再考する動きもある

◎歴史のナラティブな構築のタイプ (pp.18-19)

- ・Rüsenは歴史意識の多側面的な理解を提唱し、この概念的な特徴をまとめている
 - (a) 意識と認識の異なる程度
 - (b) 異なる次元(政治的、認知的、修辭的、美的)
 - (c) 普通から複雑な範囲までの様々な表現モード
 - (d) 異なるトポス（※トポス＝基本的な論述形式）
 - (e) 歴史の物語構成が持つ4つのタイプ
 - ①伝統的なタイプ（過去は出来事の集合体。現在と過去に違いが見られない。現在にとって直接的な意味を持つ）
 - ②典型的なタイプ（時間の経過とともに変化することのない、歴史をまたいだ妥当性がある。普遍的法則の定式化のために適切かどうかを調べ、現在に適用する）
 - ③批判的なタイプ（上2つのタイプと反対の立場。反証のエビデンスと反証の物語によって、過去の現象から描かれる直接的な意味を議論する）
 - ④発生的なタイプ（歴史的变化の必然性を認めており、変化は脅威を示すだけでなく、可能性ももたらすと考える）
- ・Rüsenの類型はランケやドロイセン、ホワイトなどの多様な思想家を含む、専門的な歴史学の思考モードに由来している。
- ・Rüsenは上記の4つのタイプに対し、進歩的な論理を仮定し、最初から最後に発展するとしているが、実証的な根拠に欠けている

◎歴史意識の次元 (pp.19-20)

- ・Pandelは構造的なアプローチで、社会を捉えた歴史意識の概念を提唱している

- ・ 歴史意識を、7つの絡み合った意識からなる心的 (mental) 構造であるとしている
- ・ 3つの基本的なカテゴリー = 歴史の領域
 - ①時間 (「昨日」「今日」「明日」)
 - ②真実性 (「本物の」「架空の」)
 - ③歴史性 (「静的」「変更可能」)
- ・ 4つの社会的なカテゴリー (ability との関連性にも触れている)
 - ④アイデンティティ (「私たち」「あなた」)
 - 他者と自分両方における歴史的に根拠のある帰属意識を認識・反映する能力を含む
 - ⑤政治 (「上」「下」)
 - 権力との関係で構成される社会を特定し、分析する能力と関連
 - ⑥経済-社会 (「貧しい」「豊かな」)
 - 社会的不平等を分析する能力と関連
 - ⑦モラル (「正しい」「間違った」)
 - 歴史的現象を適切に評価する能力と関連
- ・ Pandel の概念は、実証的研究における理論の足場かけとしても使用されている

■心理学の概念としての歴史意識 (pp.20-21)

- ・ 本章での歴史意識は、純粋な理論として概念化されているのではなく、部分的に、子どもや青年を対象にした実証的な分析も根拠にしている
- ・ 歴史意識は、過去・現在・未来の重要な局面をまとめて対応する際の基礎となる、心的構造またはコンピテンシーとして理解されている
- ・ このコンピテンシーは、物語的行為 (=歴史的物語を伝え、理解すること) によって、それ自体を明確にする
- ・ ナラティブな思考モードは、歴史領域に固有のものとなすことができる
- ・ 歴史意識は歴史的思考に限定されるものではない
 - 科学的なものと区別される、
 - 実存的なもの (歴史的に媒介されたアイデンティティと関心など) もある
- ・ 現代の歴史意識は、グローバル化した世界の課題に対する回答の1つになる
 - 異文化間のコミュニケーションに適した歴史意識
 - 歴史意識は歴史家の特権ではない

■グローバルになった世界、不平等に満ちた世界：歴史意識の課題 (pp.21-23)

- ・ 世界がグローバル化するには、現代の歴史意識が必要

- ・最も重要なのは、差異や他者性に対する意識を高めることである
- ・ドイツの歴史教育における多様性の研究は短期間で大きく変化しており、重要な理論的な議論が行われている
- ・中でも Rüsen と Pandel の歴史意識に依拠しつつ、Pandel の歴史意識を変容させた、Martin Lücke のアプローチは、この研究領域に大いに貢献している
- ・Lücke は社会的不平等の歴史的起源として、人種、階級、性別など複雑に交差しているカテゴリーや、これらの複雑な歴史を語ることに興味を持っている（例：黒人女性）
- ・Lücke は Pandel の 3 つの基本的なカテゴリーを維持しつつ、4 つの社会的カテゴリーに対しては、歴史意識のカテゴリーとレベルの 2 次元からなる領域を提案している
- ・ただし、多様性に対する真剣な課題に取り組んでいる実証的な研究がほぼ完全に抜け落ちているのが重大な問題になっている

■カリキュラムにおける歴史意識 (pp.23-24)

- ・歴史意識の議論は、教育現場におけるカリキュラムの構築にも影響を与えている
→ただし、連邦的な教育の構造なので、カリキュラムへの反映度合いを定式化しにくい
- ・歴史意識という用語は少しの州にしか存在していないが、歴史意識の重要性は共有され、Rüsen と Pandel の概念化は暗に、部分的にカリキュラムに反映されている

■歴史意識を評価可能なコンピテンシーに変換する (p.24)

- ・2011 年の PISA ショックによって、ドイツの教育はコンテンツから領域特有のコンピテンシーに焦点が当たるようになった
- ・複数の異なるコンピテンシーのモデルが提唱されるようになった（以下、2 つ紹介）

◎歴史的思考 (pp.24-25)

- ・最も広く記述され、議論されているモデル。歴史意識における理論と密接に接続している
- ・歴史的思考のモデルは、部分的に重複する 4 つの領域から構成されている
 - ①歴史的な質問をするコンピテンシー
 - ②方法論的なコンピテンシー
→歴史資料を分析する能力や、ナラティブを分析する能力など
 - ③適応コンピテンシー
→自分が属するものの理解や、自分や他者の見方を修正する能力や意欲など
 - ④主題コンピテンシー
→上記全てのコンピテンシーに関連。歴史的な用語や関連する用語を使用するなど

- ・このモデルの特徴として、歴史的思考の評価の構成に役立つ点が挙げられる

◎National Educational Standard for History (pp.25-26)

- ・ドイツの歴史の教師グループが作成したドラフト（2006年や2010年頃）
 - ・歴史意識に依拠しつつ、スタンダードの結びつけを定義している
 - ・主題コンピテンシー、解釈と省察コンピテンシー、
メディアに関する方法論的なコンピテンシーの3つを基礎とする
 - ・具体的な歴史のコンテンツをコンピテンシーの中心に位置付けている点が特徴
-
- ・このようなモデルは歴史意識の具体化や新たな議論を生む点では評価されている
 - ・一方、このようなモデルが厳しいガイドラインになり、創造性を制限する懸念もある